

## 丸森町（丸森中学校区）の取組

### 【推進校】

丸森町立丸森中学校

### 【目標】

実践体験型PBL（Problem Based Learning）の手法を継続し、丸森町の自然・文化・産業の特色と課題を把握した上で、地域住民と課題を共有し、自ら解決策（FPM案：Future Project for Marumori）を提案・実践する生徒を育成する。

### 【取組の概要】

◎第2学年

今年度の第2学年生徒に課された中心的な目標は、「丸森町の課題を把握し、中学生だからこそできることを考え、解決する」ことである。この目標を達成するため、以下の段階的な活動が計画・実行された。

段階	主な活動内容と時期
1. 課題の設定	6月～7月：オリエンテーション、昨年度活動の振り返りを実施。地域課題の希望調査を基にグループを編成し、活動計画を策定。
2. 情報の収集	夏休み～9月：各グループが設定したテーマに基づき、地域住民や事業所へのインタビュー、現地調査などのフィールドワークを実施。
3. 整理・分析	9月：フィールドワークで収集した情報を整理し、課題の背景や原因を分析。解決策の方向性をグループで討議。
4. まとめ・表現	9月～1月：分析結果と提案をスライドやウェブサイト、ポスター等の形式でまとめる。最終成果発表会（1月22日）に向けた準備とリハーサルを実施。
5. 振り返り	2月：年度全体の活動を個人およびグループで振り返り、次年度の活動への見通しを持つ。

昨年度の「学校主導の課題発見」から一歩踏み出し、今年度は「丸森町の真のニーズに基づいた解決策の実践」に重点を置いた。

### 1 地域課題の直接収集と提示

今年度、大きな特徴として教頭が各地区（丸森・舘矢間・大内・小斎・金山・筆甫・大張・耕野）代表が集まる住民自治組織協議会に出席し、直面している生の声（地域課題）を挙げてもらうよう、各地区代表へ打診した。その後、集約した地区別の課題（少子高齢化、伝統芸能の後継者不足、空き家、鳥獣被害等）を資料として生徒に提示し、そこから自分の関心に近い課題を選択してグルーピングを行い、昨年度、宮城教育大学の本図先生にご指導いただいたことをもとに、自ら探究の「問い」を立てた。

1 貴地区で現在、特に課題と感じている地域課題はどのようなものですか？

- ・少子高齢化、人口減少
- ・担い手不足、後継者不足
- ・害獣被害による営農力、意欲低下
- ・高齢化に伴う住民自治力の低下

2 上記の課題解決や地域活性化のために、今後特に力を入れたい活動はありますか？

- ・地区内外の人的交流
- ・害獣対策支援
- ・参加意欲が高まるような事業の提案
- ・安心して終末を迎えられる取組作り（エンディングノート作成、終活など）

## (1) 丸森町の未来のために解決すべき課題

アンケート調査の結果、多くの生徒が共通して認識している課題が浮き彫りになった。特に頻繁に挙げられたのは以下のとおり。

- 少子高齢化・人口減少：最も多くの生徒が指摘した課題であり、町の持続可能性に対する強い危機感がうかがえる。
- 商業施設の不足：日常的な買い物の不便さや、若者が集まる場所の少なさに関する意見が多数見られた。
- 町の知名度：町外における丸森町の認知度の低さを課題とし、観光振興や情報発信の必要性を指摘する声があった。
- ごみ問題・ポイ捨て：ポイ捨てなどの環境美化に関する問題意識を持つ生徒もいた。
- 交通の不便さ：公共交通機関の便数やアクセスの悪さなど、移動手段に関する課題が挙げられた。

## (2) 丸森町の未来のために残し、受け継ぐべきもの

一方で、生徒たちは丸森町が持つ多くの魅力や資産を深く認識しており、それらを未来へ継承したいという強い願いを持っていた。

- 豊かな自然：町を取り巻く山々や川など、美しい自然環境を最も価値あるものとして挙げる声が多数を占めた。
- 地域の伝統文化・行事：「齋理幻夜」や「丸森いち」といった地域の祭りをはじめ、古くから伝わる文化を大切なものと捉えていた。
- 特産品：干し柿などの地域特有の産品を、町のアイデンティティとして認識していた。
- 齋理屋敷などの歴史的資産：齋理屋敷に代表される、町の歴史を物語る建造物や文化遺産の価値を高く評価していた。
- 地域の人々の温かさ：町民の優しさや地域コミュニティの温かい繋がりを、未来に残すべき大切な要素として挙げる生徒もいた。

これらの課題認識と資産の再発見は、生徒たちが自らの探究テーマを設定し、具体的な解決策を模索していく上での重要な原動力となった。特に、人口減少や知名度の低さといった課題、そして伝統文化や特産品という資産への認識は、後述する和紙の魅力発信サイト制作や特産品（干し柿）を使った新商品開発といった、具体的かつ独創的な探究活動へと直結していった。

## 2 課題解決に向けた探究活動プロセス

生徒たちが自ら特定した地域の課題と資産を起点に、探究活動は具体的な行動フェーズへと移行した。生徒たちは自らの関心に基づき、26の探究グループを結成。インタビューや現地調査、試作品開発といった多様なアプローチを通じて、地域社会と直接関わりながら課題解決に挑んだ。

### (1) 探究テーマの設定

生徒たちは、事前調査で明らかになった課題や魅力に基づき、以下の7つの大テーマに分かれ、各グループでより具体的な探究課題（FPM案）を設定した。

- 伝統 (A)：和紙作りや伝統行事の継承と発信
- 観光・イベント (B)：「齋理幻夜」や「丸森いち」などのイベントの魅力向上とPR
- 特産品 (C)：干し柿などを活用した新商品開発と魅力発信
- 環境 (D)：生ごみ削減など、地域の環境問題への取り組み
- 人口問題 (E)：人口減少対策と町の魅力発信
- 子育て・商業 (F)：子育て支援や商業施設の活性化策の検討
- 地域活性化 (G)：金山、小齋、大内、筆甫など、各地区が抱える固有の課題解決

## (2) 多角的なフィールドワークと解決策の実践

各グループは、設定したテーマを探究するため、夏休み期間から9月にかけて地域でのフィールドワークを積極的に実施した。生徒たちの探究活動は、単なる調査にとどまらず、「干し柿ジャムの試作・レシピ提案」「生ごみ減量のためのコンポスト（ネグナッター）製作・設置許可取り」「空き家カフェのメニュー考案」「伝統和紙の魅力発信サイト制作」など、収集した地域課題に直結する具体的な行動を展開した。そのフィールドワークは、町役場、まちづくりセンター、地域団体、そして地元事業者の皆様といった、極めて多くの地域の方々の温かいご協力とご指導によって支えられた。主な協力者と活動内容は以下の通り。



フィールドワークの様子

協力いただいた地域の方々	主な活動内容
町役場職員（商工観光課、子育て定住推進課など）	インタビュー、企画提案、情報収集
まちづくりセンター職員	地域イベントに関する相談、連携
観光施設担当者（齋理屋敷、観光案内所など）	取材、イベントの歴史や運営に関するヒアリング
地域団体（「立石に登ろう会」など）	イベント準備の手伝い、共同活動
地域事業者（栄泉堂、養蜂家、農家など）	職場体験、商品開発に関するインタビュー、アドバイス

## (3) 各班による具体的な取り組みと成果物

26グループの活動は多岐にわたるが、ここでは代表的なプロジェクトの目的（FPM案）、活動内容、そして最終的な成果物について、テーマ別に紹介する。

### ○伝統分野（A）

#### ・1班

目的：丸森の伝統（和紙作り）を県外に広める。

活動内容：和紙の歴史や作り方について取材し、サイトを作成して情報を発信する。

最終成果物：和紙の魅力を伝えるウェブサイトの公開。

### ○観光・イベント分野（B）

#### ・3班

目的：丸森町最大イベント「齋理幻夜」の人気なわけを調査する。

活動内容：関係者への取材を基に、イベントの魅力を伝えるポスターを作成する。

最終成果物：作成したポスターを齋理屋敷に掲示してもらう。

### ○特産品分野（C）

#### ・9班

目的：丸森の干し柿の魅力を県外に伝える。

活動内容：干し柿を使ったジャムを試作する。

最終成果物：試食結果を基に、製造工場へレシピを提案する予定。



#### 4 アンケート結果の分析から見えた成果と課題

PBL活動の成果を測る上で最も重要なのは、活動が生徒一人ひとりにどのような影響を与えたかということである。ここでは、生徒たちの活動前と活動後の振り返りアンケートを分析し、地域への理解の深化、自己の成長、そして実践的なスキルの獲得といった側面から、その学びの軌跡を明らかにする。

##### (1) アンケート調査概要

- ・ 対象:丸森中学校 第2学年生徒 83名
- ・ 実施日時: 2025年6月実施(学習の導入・展開時期)  
2026年2月実施(学習のまとめ時期)
- ・ 内容:自己肯定感、将来の夢、社会貢献意識、総合的な学習の時間への取り組み状況などに関する全10問の選択式設問、およびFPMに関する記述式設問。

##### (2) 定量的分析:意識の変化と傾向

###### ①自己肯定感と将来の夢

調査期間を通じて、「自分にはよいところがある」と感じている生徒や「将来の夢や目標」を持つ生徒は一定数存在するが、2月の調査時点でも「どちらかといえば当てはまらない」と回答する生徒が一部見受けられ、個々の自信形成には継続的な支援が必要であることが示唆される。

###### ②社会貢献意欲と他者貢献

特筆すべきは、「人の役に立つ人間になりたい」という意欲が非常に高い点である。多くの生徒が「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」と回答している。また、「地域や社会をよくするために何かしてみたい」という意欲も、学習が進むにつれて具体的な活動目的へと結びついている様子が伺える。

###### ③学習への主体性と情報活用能力の習得

「自分で課題を立てて情報を集め、整理・発信する」という学習サイクルに対し、多くの生徒が肯定的な実感を抱いている。特に2月の調査では、「友達や地域の様々な人と関わりながら学ぶことは、将来の自分にプラスになる」と考える生徒が多く、地域社会との接点が学びの質を高めていることが分析できる。

##### (3) 定性的分析:FPM(Future Project for Marumori)案の傾向

2月の調査で行われた「丸森の未来に向けて、私たちのFPMは～～である」という記述回答からは、生徒たちが活動を通じて得た具体的な目的意識が読み取れる。

○丸森の魅力発信と活性化:「丸森の良さを町の内外の人に伝えるもの」「人口を増やすために魅力を広める」「丸森をさらに活性化させる第一歩」といった、PRや町の存続を意識した回答が目立った。

○伝統と特産品の継承:「蚕(かいこ)の魅力を広める」「和紙を広める」「筆甫のへそ大根を知ってもらおう」など、具体的な地域資源に着目した活動が多く挙げられている。

○課題解決と貢献:「猿の被害を減らす」「子育て支援」「イベントのボランティア」など、地域の困りごとに寄り添う姿勢も見られる。

○持続可能性と成長:「継続して後輩に受け継いでもらうことが必要」「大人になった時に役立つ活動」といった、自分たちの代だけで終わらせない視点や、自己の成長として捉える回答も存在している。

○活動から得られた新たな発見と「丸森町のよさ」:フィールドワークやプロジェクト活動を通じて、生徒たちはこれまで知らなかった地域の側面を発見し、丸森町への愛着を一層深めました。生徒たちの報告からは、以下のような学びが読み取ることができる。

○地域のイベント運営の裏側や関係者の思い:普段参加者として楽しんでいる祭りが、多くの人々の情熱と努力によって支えられていることを学び、地域活動への感謝と尊敬の念を抱いた。

○受け継がれてきた伝統文化の価値と技術：和紙作りなどの伝統産業に触れる中で、その技術の奥深さや、文化を継承することの重要性を実感した。

○自然の豊かさと人の温かさの再認識：実際に地域の方々と対話し、活動を共にする中で、改めて丸森の豊かな自然と、そこに住む人々の優しさや協力的な姿勢を「町のよさ」として再認識した。

○課題解決のための協働の重要性と難しさ：グループで一つの目標に向かう過程で、協力して物事を成し遂げることの大切さと、意見を調整する難しさの両方を体験的に学んだ。

#### (4) 取組の成果

以上のアンケート結果から、生徒たちは、今年度のPBL活動を通して、単なる知識の習得にとどまらず、「地域の一員として自分に何ができるか」を主体的に考える当事者意識を育んでいることが明らかになった。各グループが設定した多様なテーマのもと、生徒たちは地域の方々と協働しながら探究活動を進め、課題設定から情報収集、分析、表現に至る一連のプロセスを実践的に経験し、数多くの具体的な成果物を生み出した。

一方で、「作っただけでは魅力発信は難しい」といった声に見られるように、地域課題の解決や情報発信の難しさを現実的に捉える視点も育ちつつある。しかし、多くの生徒が自らの取り組みを「丸森の未来にプラスである」と肯定的に捉えており、こうした認識は、地域への理解や愛着を深めるとともに、地域社会への参画意識を確かなものにしていく。

このような生徒の意識の変容を踏まえると、今回のPBL活動では、生徒たちに二つの大きな学びをもたらした。第一に、自ら地域を歩き、人々と対話する経験を通して、丸森町を「学ぶ対象」から「自分事」として捉える意識が育まれたこと。第二に、探究活動を通じて、課題解決力、協働性、コミュニケーション能力といった、これからの変化の激しい社会を生きる上で不可欠な力を実践的に身に付けたことである。これらの成果は、本校が大切にしてきた「志教育」、すなわち「自分のよりよい生き方を求め、学んだことを社会に役立てようとする視点」を具体的に体現したものといえる。

#### (5) 取組の課題

2年目の実践体験型PBL（FPM活動）を通じて、生徒の主体的・協働的な態度の育成に大きな成果が見られた一方で、次年度（最終年）に向けて解決すべき以下の課題が明確になった。

##### ○分析力・展望力の不足（「感想」からの脱却）

成果発表会後の保護者や地域の方々からの評価では、「活動内容はよくまとまっているが、それに対する生徒自身の感想・分析・今後どうしたいかという一歩踏み込んだ視点が不足している」との指摘が多く寄せられた。自分たちの活動が地域にどのような影響を及ぼしたのか、客観的なデータや人々の反応をもとに「分析」する力の育成が求められる。

##### ○プレゼンテーションスキルの向上

生徒自身の自己評価において、「聞き手の目を見て話せなかった」「声が小さかった」という反省が目立った。発表会会場の雑音（ヒーターや他グループの声）に対する音量不足も指摘されており、ICT機器（タブレット端末）を使いこなす技術に加え、より「伝わる」ための表現技術のトレーニングが必要である。

##### ○教職員の地域理解と系統的な指導の充実

生徒がより深い探究を行うためには、伴走者である教職員自身が地域の現状と課題（各地区の住民自治組織協議会が抱える悩み等）をさらに深く理解し、指導スキルを向上させる必要がある。また、宮城県の「志教育」が掲げる「小学校から高校までの学びの接続」という観点から、小学校での学びを中学校のPBLにどう昇華させるか、指導計画の再構築が不可欠である。

### 5 来年度（3年目・最終年）に向けて

2年間の積み上げを土台に、3年目は「志」を具現化し、持続可能な地域貢献へと繋げる段階を目指す。

### ○FPM案の「実装」と成功体験の深化

2年目に提案した解決案を、単なる「提案」で終わらせず、いかに地域の実際の活動に定着させるかに注力する。また、「作っただけで魅力発信を継続するのは難しい」という生徒の懸念を払拭するため、地域住民や「みやぎ教育応援団」等の外部組織とより密に連携し、生徒が「自分たちの力が社会を変えた」という確かな自己有用感（将来の自分へのプラス）を得られるようにしたい。

### ○地域と一体となった持続的な教育課程の構築

「中学生が守られる存在から、共に地域を創るパートナーへ」という地域からの期待に応え、学校・家庭・地域が協働して子供を育てる仕組みを丸森中学校区の文化として定着させる。各地区の課題解決を中核とした「志教育」を、単発の事業ではなく、教育課程の核として継続していく体制を整えたい。